

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13004

研究課題名（和文）ドイツ・ジャポニズムの転換点：ピング、マイアー＝グレーフェ、ヴァン・デ・ヴェルデ

研究課題名（英文）The turning point in German Japonism: Bing, Meier-Graefe, van de Velde

研究代表者

野村 優子 (Nomura, Yuko)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：50804134

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1890年代に美術工芸分野を中心に興隆するドイツ・ジャポニズムが、ピングとマイアー＝グレーフェによって促進されたことを証明するため、以下の項目を検証した。（1）ピングのドイツ・ジャポニズムに果たした役割、（2）ピング、マイアー＝グレーフェ、ヴァン・デ・ヴェルデの関係性、（3）美術工芸運動に対するピングとマイアー＝グレーフェの思想、（4）20世紀初頭のドイツ芸術界の状況

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代美術工芸の発展におけるピングとマイアー＝グレーフェの功績は計り知れないにもかかわらず、これまで日本では十分に研究されてこなかった。そのピングの三大事業に注目し、そこにドイツ・ジャポニズムとの接点を見出したことは、本研究の大きな成果だと言える。また、重要でありながら、詳細に語られることのなかった二人の論考 "Wohin treiben wir?" を読み解き、彼らの思想に差異をもたらした背景にはドイツ美術界の状況の変化があると結論づけたことは、今後のドイツ美術史研究に示唆を与えるものだと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to prove that Bing and Maier-Graefe promoted German Japonism in the 1890s, especially in Arts and Crafts: (1) Bing's role in German Japonism; (2) Bing, Maier-Graefe, and Van de Velde's relationship; (3) Bing and Meier-Graefe's thoughts on the Arts and Crafts Movement; (4) The state of the German art world In the early 20th century.

研究分野：西洋近代美術史

キーワード：ジャポニズム 美術工芸運動 ジークフリート・ピング ユーリウス・マイアー＝グレーフェ Wohin treiben wir? アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ ドイツ美術

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、美術だけでなく工芸・服飾・文学・演劇などにも分野を広げ、盛んに研究が進むフランスのジャポニスム研究に比べ、ドイツのジャポニスム研究は遅れた状態にある。『ジャポニスム入門』(2000年、思文閣)で桑原節子が「ドイツのジャポニスムに関しては未だ多くの未研究のテーマが残され、今後多くの研究者の排出が期待されている」と記したように、日本では2004年に翻訳出版されたクラウディア・デランクの『ドイツにおける〈日本=像〉』(思文閣)が唯一のまとまった研究書だと言える。この書では、ユーゲントシュティールからバウハウスに至るまで、ドイツにおける日本美術受容の様子が豊富な具体例を用いて詳細に描かれているが、ジャポニスムが如何なる文脈でドイツへともたらされ、そこでは如何なる議論が交わされていたかなどの欠けた視点もあり、依然として研究の余地を残したままである。

桑原によると、「ドイツのジャポニスムは英仏での印象派を中心とした第一波が過ぎた1890年代から、主にユーゲントシュティールのグラフィック、工芸デザインを中心に始まり、1910年を迎える以前に下降線を辿った」。ドイツ・ジャポニスムがフランスやイギリスに比べて大きく遅れて始まった理由として、ドイツには英仏にジャポニスムをもたらした印象主義に相応する画家がほとんどいなかったことと、連邦制によって芸術活動が各都市に分散し、英仏のようにジャポニスムの中心地となる首都を持たなかったことの二つを挙げている。三つ目の理由として、英仏ではジャポニスムを市民層にまで広める契機となった万国博覧会が、ドイツでは一度も開催されなかったことも考えられる。一方デランクは、ドイツ・ジャポニスムの発生について、「日本への熱狂は後期バロックとロココの時代に中国趣味の流れで輸入された日本の漆器や陶磁器などの品々が端緒となったが、19世紀末にはいわばその第二波がパリを経由してドイツへやってきた」と記している。

両者の言説にある「第一波」「第二波」は、ジャポニスム研究において重要な概念である。1856年のフェリックス・ブラックモンによる『北斎漫画』発見をもって開始されたジャポニスムは、1890年代を境として第一波(前期)と第二波(後期)に分かれ、第一波で展開したのは主に絵画である。絵画に現れたジャポニスムにも二つの発展段階があり、既存の西洋の形式に日本の事物を持ち込みそこに異国情緒を見る「ジャポネズリー」の段階と、日常的な主題や大胆な画面構成といった日本美術の特徴を西洋絵画と融合させる「ジャポニスム」の段階がある。つまり、第一波とは、西洋絵画において日本美術の表層的な受容「ジャポネズリー」から、本質的な受容「ジャポニスム」へと進化する過程であった。これをドイツ・ジャポニスムに当て嵌めると、「ジャポネズリー」の展開を見せる画家はドイツにもいた。しかし、それを「ジャポニスム」へと押し上げ、自らの表現として昇華させた印象主義の画家たちがドイツには存在しなかった。そのため、第一波のなかでも特に重要な絵画における本質的な受容を経験せぬまま、ドイツは第二波を「パリを経由して」迎えることとなった。

第一波と第二波の違いとは、第一波では絵画に限定されていた活動が、第二波では版画、ポスター、工芸デザインなど美術工芸にも拡大され、装飾分野全体が日本美術を媒介として再生したことにある。この分野で活躍したのがロートレックやミュシャであり、市民社会に見合った華やかな装飾様式「アール・ヌーヴォー」が誕生した。この美術工芸に特化した第二波は、1900年パリ万国博覧会を頂点として次第に終息したフランスを引き継ぐかのように、20世紀初頭のドイツにおいて目覚ましい成果をあげている。イラストレーションの分野では、アール・ヌーヴォーの装飾性に庶民的親しみやすさと若々しさを加味した「ユーゲントシュティール」が登場し、工芸デザインの分野では、「ドイツ工作連盟」や「バウハウス」において現代にも影響を及ぼし続けるモダン・デザインが誕生した。ジャポニスムの第二波は、フランスからドイツへと引き継がれたことによって、真の国際様式へと発展したのである。

ドイツ・ジャポニスムで最大の成果をあげた美術工芸分野が、フランスからドイツへと伝播した経緯はとても重要であるように思われる。にもかかわらず、この経緯について詳述した研究は今のところ見られない。そこで本研究では、第二波の仲介者として、ジークフリート・ビング(Siegfried Bing, 1838-1905)、ユリウス・マイアー＝グレーフェ(Julius Meier-Graefe, 1867-1935)、アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ(Henry van de Velde, 1863-1957)の三者に注目し、考察を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてドイツで発表された日本美術批評の収集と分析を通じてドイツ・ジャポニスム研究の基盤を構築し、これまでドイツ・ジャポニスム研究において等閑視され、作品分析に終始していた状況に「美術批評」という新たな視座をもたらすことにある。具体的には、1890年代に美術工芸分野を中心に興隆するドイツ・ジャポニスムが、ビングとマイアー＝グレーフェによって促進されたことを証明するため、以下の項目について検討を行なった。(1)ビングのドイツ・ジャポニスムに果たした役割、(2)ビング、マイアー＝グレーフェ、ヴァン・デ・ヴェルデの関係性、(3)美術工芸運動に対するビングとマイアー＝グレーフェの思想、(4)20世紀初頭のドイツ芸術界の状況

3. 研究の方法

(1) ビングのドイツ・ジャポニスムに果たした役割を明らかにするため、ジャポニスムにおける彼の三大事業、『芸術の日本』の出版、「日本版画展」の開催、「アール・ヌーヴォー」の開業に焦点を当て、2004年開催の展覧会「アール・ヌーヴォー：ビングの店」を機にガブリエル・P・ワイスパークが編纂した図録 *L'Art Nouveau: La Maison Bing* (Stuttgart: Belser 2004) を主要参考文献として、まず、ビング一家とドイツとの関わりと各事業の詳細を確認した。次に、『芸術の日本』のドイツ語版出版に尽力した五名、ユストゥス・ブリックマン (ハンブルク美術工芸博物館館長)、ユーリウス・レッシング (ベルリン美術工芸博物館館長)、アルトゥール・パプスト (ケルン美術工芸博物館館長)、カール・グラフ (ドレスデン美術工芸博物館館長)、ゲオルク・ヒルト (ミュンヘンの出版業者) とビングとの接点を探った後、当時のドイツ新聞雑誌におけるビング関連記事を集め、各事業がドイツに与えた影響について考察した。

(2) 新しい美術工芸様式「アール・ヌーヴォー」をパリで展開し、ドイツへと紹介した人物として、ビング、マイアー＝グレーフェ、ヴァン・デ・ヴェルデの存在が浮かび上がる。パリ、ベルリン、ブリュッセルで活動していた三者がいかなる状況のもと出会い、協働するようになったのか、マイアー＝グレーフェの書簡および日記、ヴァン・デ・ヴェルデの自伝 *Geschichte meines Lebens* (Piper: München 1962) などを基礎資料として考察した。

(3) 1896年以後、新しい美術工芸様式をドイツへと紹介し、根付かせようとしたビングとマイアー＝グレーフェが、美術工芸に対していかなる思想を持ち、共有していたのかを明らかにするため、マイアー＝グレーフェがビングの思想を代弁した二編の雑誌記事「アール・ヌーヴォー」、「装飾芸術」および、二人の同名の美術批評「我々はどこへ漂いゆくのか？」をもとに考察した。

(4) ビングは1897年に、マイアー＝グレーフェは1913年に、上記の美術批評「我々はどこへ漂いゆくのか？」を執筆している。マイアー＝グレーフェはビングの思想に共感し、その活動を支えていたはずなのに、自身の執筆時には、ビングの美術工芸の未来に対する楽観的な論調を悲観的なものへと変えた。この16年の間に何が起きたのか。この謎を解明するため、1910年代のドイツ芸術界が置かれた状況を調査し、同時代の芸術家や批評家の言説を集めることで、マイアー＝グレーフェの主張の正当性について検証した。

4. 研究成果

(1) ビングは第一に商人であって芸術家でも批評家でもないため、自身の言葉を多く残さず、彼に関する言説も少ない。断片的な情報を繋ぎ合わせた結果、彼の三大事業は、他国に遅れてジャポニスムを開始したドイツ人たちに美術工芸の刷新という進むべき方向を示し、芸術と生活を一致させるという新しい思想をもたらしたことが判明した。ビングは活動の拠点をパリに置き、自身もフランス人であることを自覚しながらも、ドイツ人としての出自を忘れることなく、しばしばその人脈を利用して、活動範囲をドイツへ広げようと試みていた。またドイツにも彼の活動を支援する協力者たちがいて、彼らもドイツ美術工芸の振興を願い、ビングの日本美術に関する知識やその商品を頼りにしていた。この相互扶助の関係が20世紀初頭のドイツで始まる美術工芸運動の起爆剤となっていたのである。ドイツ・ジャポニスムにおけるビングの役割とは、ドイツ美術工芸の未来を照らす道案内人であった。

(2) ヴァン・デ・ヴェルデの自伝や、マイアー＝グレーフェがムンクに宛てた1895年12月12日と1896年4月14日の二通の手紙などから、ベルリンの雑誌『パン』が縁となってマイアー＝グレーフェとビングの交友が開始されたこと、美術工芸の現状を知るといった共通した目的から各々1895年の別の時期にヴァン・デ・ヴェルデと出会ったこと、パリ移住後マイアー＝グレーフェはすぐにビングの芸術顧問となり、1896年以後活動をともにしたことが判明した。

(3) 雑誌記事「装飾芸術」と「アール・ヌーヴォー」を精読することで、理論家のマイアー＝グレーフェが実務家のビングに代わり、彼の事業の意図を表明したこと、「我々はどこへ漂いゆくのか」という言葉が、マイアー＝グレーフェによってすでに発せられていたことが明らかとなった。そして、ビングの美術批評はこの問いに答えるべく、過去における美術工芸の問題点と未来に向けての提言を記したことが確認され、マイアー＝グレーフェの論考を照らし合わせることで、二人の一致した共通認識やマイアー＝グレーフェの心境の変化が導き出された。

(4) 1910年代のドイツ芸術界に関する言説を集めることで、マイアー＝グレーフェはドイツ美術工芸の現状に失望したこと、新しく台頭した前衛芸術に反応できなかったこと、悲観的な時代精神に飲み込まれていたことが明らかとなり、1890年代には美術工芸の推進者、1900年代には同時代美術の紹介者、1910年代には同時代芸術の批判者となったマイアー＝グレーフェの度重なる転身が、それまで彼の愛読者だった芸術家や批評家たちの不信を招き、美術批評家としての評判を著しく傷つけたことが判明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 野村優子	4. 巻 36
2. 論文標題 「我々はどこへ漂いゆくのか」Wohin treiben wir?: ジークフリート・ピングとユーリウス・マイアー＝グレーフェ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 31-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野村優子	4. 巻 8
2. 論文標題 ドイツ諸都市とジャポニスム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 令和2年度愛媛大学公開講座「世界の都市と地域」	6. 最初と最後の頁 24-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村優子	4. 巻 33
2. 論文標題 ドイツ・ジャポニスムにおける日本美術商ジークフリート・ピング	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 15-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野村優子
2. 発表標題 柳瀬正夢とドイツ美術
3. 学会等名 愛媛県美術館 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野村優子
2. 発表標題 柳瀬正夢とジョージ・グロッス
3. 学会等名 第107回九州藝術学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野村優子、井上祐樹、牛島光太郎
2. 発表標題 Kuenstlerleben 芸術家の生活：ドイツと日本
3. 学会等名 ギャラリー尾形（福岡）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野村優子
2. 発表標題 日本とドイツの美術交流：近代美術批評の誕生とジャポニスム
3. 学会等名 第7回ジャポニスム学会奨励賞受賞記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野村優子
2. 発表標題 Wohin treiben wir?: ジークフリート・ピングとユーリウス・マイアー=グレーフェの同時代美術論
3. 学会等名 日本独文学会西日本支部第71回研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野村優子
2. 発表標題 ドイツ・ジャポニズムの転換点：日本美術商ジークフリート・ピングとドイツ
3. 学会等名 愛媛日独協会公開講演会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------